

ぶらすα

—出居清太郎ワールドへのご招待—

No.103
2016・秋

二つで一つ、の理

(1)カスのような言葉というが

カスのような言葉と言いますが、本当はそのような言葉はないのです。ただ、聞く人がカスのような言葉だと思っっているのです。カスのような言葉として受け取っているような心では、そこから養分を取ることになるはずがありません。

カスと思うも思わぬも、その人の心の持ち方ひとつですが、カスと思ったときから、カスはカスだけになってしまうのです。

カスもあるうが、カスばかりではないはずだ、どこかに役に立つものがあるはずだという心で、何事も見られるときに、万物を尊び愛することができます。

(出居清太郎先生の言葉から)

私たちはよく、道端の草を指して、名もない草とか、雑草とかいいますが、たしかにどんな草にもそれぞれに名前があるはずですね。名前のない草を見つけたら、新種発見としてニュースになるでし

よう。

そのことは私たちもわかってはいるわけです。その上で「名もない草」と言ったり、「雑草」と言ったりしています。ですからそれは、私たちの、その草に対する認識、評価のあらわれといえます。

つまり、その草を気にもかけていない、評価していない、むしろやっかいものと思っている、ということでしょう。しかしそれは人間の都合から見た勝手な見方に過ぎなくて、草から見れば、人間は「雑動物」ということになるでしょう。

私たちは、人間至上主義に立つのではなく、人間も、大宇宙からのちを与えられた他の動植物と同じ存在だという謙虚さを持っていたいものだと思います。

その謙虚さは、生活する中で、他の人

に対する際にも大事なのではないでしょうか。他の人の出した言葉を、カスのような言葉として一蹴するのではなく、謙虚に、その言葉、その人に対したいものです。結局のところ、カスのような私の評価は、私の持っている基準に照らしてのことであって、別の基準に照らせば、また別の評価があり得るわけですから。

また出居清太郎先生は、同じ話を聞かされても、初めて聞くように聞くのが誠の聞き方です、と説かれました。

たしかに、またあの話かと思った途端、もう話は耳に入らなくなるでしょう。初めて聞くつもりで聞けば、前に聞いた時には気づかなかったことに気づくことがあります。小説でも名作は何度読んでも

新しい発見があるように。

(2) 二つで一つ、の理

息は吐く息と吸う息と二つで一つである。この理が我々の生活の中にも常に活かされなければ、行き詰まり(息詰まり)となる。

人様に差し上げるのは好きだがいただくのはきらいだ、話をするのは得意だが聞くのは苦手だ、世話をするのはいいがされるのはいやだーというのでは、吐く



カット 齋藤啓子

息ばかり、あるいは吸う息ばかりであつて、これでは必ず行き詰まる。見事に差し上げて、そうして上手にいただく。これが正しい交流である。

(出居清太郎先生の言葉から)

世の中、大小さまざまな現象があり出来事が起こります。そしてそれらはデタラメに起こるのではなく、それらの間にはたしか秩序、理があるようです。その理の一つが「二つで一つ」の理です。

世の中、二つで成り立っているものが多くあります。先ほどの呼吸はその最たるものですが、人の体を見てみれば、肺が左右二つですし、腎臓や目、耳、手、足もそうですし、そのほか動脈と静脈、左脳と右脳、心臓には左心室と右心室な

どたくさんあります。

人間関係についても、親子、夫婦、師弟、上司と部下、雇い主と従業員、売り手と買い手、家主と借家人など、いろんなところで「二つで一つ」の関係が見られます。「二つで一つ」ですから、どちららも必要で、どちらかが欠けてはいけないということ。つまり一方が他方を無視したり、ないがしろにしたりしないで、お互いに相手を尊重し、調和していかないといけないということでしょう。

差し上げる・いただくも、話しをする・聞くも、世話をする・されるも、一方だけではなく、両方の調和が必要だとい

ことになります。

紙にしても表と裏があるように、物事には二つの側面があるという見方を常に頭においておけば、直面する事態に対する対応の仕方にも余裕ができるのではないのでしょうか。

編 集 後 記

猛暑、台風、洪水、リオ五輪、北朝鮮、ニュースに事欠かない夏でした。ニュースに出てくる部分が表だとしたら、裏には何があつたでしょうか。

次号は3月1日発行です。(H・Y)